

## ワレモコウの花束

菅野淳一

福島県・65歳・無職

あなたが訪ねて来たのは、高校生活最後の夏休みが終わる日でしたね。お下げ髪をほどいた赤い紐で結わえた花束。「これ、花？」といぶかる私に、あなたは、いたずらっぽく小首をかしげて「ワレモコウ」。知らなかったのです。暗い色合いで花びらも飾りもない穂が花だなんて。私がコップに挿して机に置くと、肩越しにあなたが囁きましたね。

「悪い癖よ。溜息つかないで。幸せが逃げちゃうから」

あなたの熱い息吹と視線を頬の辺りに感じて、私はうろたえていました。言葉を見失って恋を語れなかったら、抱きしめればよかったのですね。ごめんなさい！ 私が入社試験を受けに上京する前日のことでした。

上野駅で東北本線の発車を待っていた時、思わずフーッと大きく溜息。重い足取りで帰宅すると、夕陽に染まった机の花が色づいて、消えかけた火種の粒みたいに、私の目にはぼやけて映りました。幸せがあなたを連れて逃げてしまいました。

あなたの結婚を知ったのは、それから3年目の秋。その夜、ペンを握り便箋に向かいました。読んではもらえない手紙だけれど、ほとぼしる想いのたけを一気に書き綴りました。気づかなかった心の奥底に愕然としても、もう遅すぎるのです。幾度も読み返して、封筒にあなたの名をしたため、蟲が鳴いて白萩がこぼれ散る庭の片隅でマッチを擦りました。届くことのない手紙の赤い炎は、あの日、夕映えの中で見た花の色と同じでした。

——お元気なのですか。きっと美しく老いられたことでしょう。割れ爪を気にしながら、今また、許されるわけもない手紙を書いてしまいました。いつか私が旅立つ時は胸に抱いて逝くつもり。あの時、あなたが花に託した想いを私はまともに受け止められませんでした。かけがえのない青春のさなかに、どうやら私は一番大切なものを残して来てしまったようです。もし、よろしかったら、私にも吾亦紅の花束を贈らせてください。

※あの人の風聞が途絶えて久しい。老いてなお輝いているに違いない。三たび心筋梗塞で倒れた私。この手紙を妻に託して、悔いの残った青春とどうにかお別れできた思い。恋文が書ける人生ってすばらしい。